



細谷 英二

副代表幹事
構造改革進捗レビュー委員会 委員長

りそなホールディングス 取締役兼代表執行役会長

日本経済は低迷から脱却し、漸く自己革新力を取り戻しつつある。他方、新聞紙上を賑わす社会現象を眺めると、国民が信頼してきた社会システムは音を立てて崩れてきたと感じる。礼儀や倫理など人間の根源的なものが、風化していることが心配だ。

経済大国への道を歩む過程で、人材育成の面においても効率化が重視され、平均的には質が高いけれども、横並びで主体性の乏しい人材が多く生み出されてきた。学校教育においても、学力試験を中心とする画一的な評価が行われてきた。このため、個の確立がないがしろにされ、しかも、躰というルール教育は廃止され、さらに家庭においても社会との関わりを教えることが軽視されてきた。昨今、社会のルールを無視する風潮が日に日にあらわになってきている。

かつて、日本にやってきた外国人たちは、口をそろえて日本人の礼儀正しさを賞賛した。キリスト教伝来期の宣教師や幕末から明治にかけて日本を訪れた外国人の記録は、この国の人々の節度ある態度や思いやりのある行為に驚きを示している。明治の日本人は経済的には貧しかったけれど

も、その勤勉さ、礼儀正しさ、そして自分の国を守ろうとする気概において一目も二目も置かれていた。今日、世界屈指の経済大国でありながら、精神的には何ら尊敬される国とみなされてはいない。一体、21世紀の日本はどのような国になるのか。その未来像を描くには、縄文時代から自然との共存を旨として国づくりを行ってきた日本人の心の原点に立ち返ることが大切である。すなわち、グローバルに通用し、かつ日本人の優れた伝統を組み込んだシステムを構築していかなければならない。

「よく見ればなずな花咲く垣根かな」、松尾芭蕉は名もない雑草に感動し、そこに生命を見た。芭蕉の句に象徴されるように、変化を宇宙の本質とみなす日本人の心情は、地球規模での世界の調和ある発展に貢献できるのではなかろうか。ただ心配なのは、このような日本的感性というべきものが若い世代の間で失われつつあることだ。何といても、日本の未来を切り拓くのは、そこに生きる人間、特に若い人たちの心のあり方である。21世紀に求められるのは、この数千年にわたって形成されてきた“日本的心性”の堅持である。

Contents

巻頭言 細谷英二	21 世紀に残すもの	001
特集 誌上討議	コーポレート・ガバナンスのあり方を問い直す	002
リレートーク 津野正則	年金問題と新規事業創造	010
委員長インタビュー	地方行財政改革委員会 池田弘一 経済政策委員会 高橋 温	011
経済同友会最前線	地方行財政改革委員会提言 他	013
同友会スケッチ	2006年5月の記録と7月の予定	023
新入会員紹介	2006年5月19日現在の入退会者	025
私の思い出写真館 福島吉治	ウェルチによるGEの再生と拡大	026